

C-33 タピスリにみる服飾の流行
日本女大家政 佐々井啓

ゴシック期のタピスリは、主題の内容と画面構成によって、当時の風俗をかなりよく表わしている。したがってタピスリの研究により、服飾の流行を顕著にとらえることができるであろう。ここでは15世紀中頃に制作されたタピスリ2点をとりあげ、研究した。

「狩獵(1425~50頃, Victoria and Albert Museum)」は、「鹿狩」「かわうそ狩」「野鳥狩」「熊狩」の4枚からなり、樹木と城を背景にして、宮廷人の狩獵の場面が牧歌的に表わされている。婦人はウアランドヒート型ロールを多く身につけており、男性はゆったりとしたジャックや短いローブ、シャフロンを用いている。

「野蛮人の舞踏会(1460~70頃, Eglise de Nantilly)」は、野外での仮面舞踏会を主題としており、体を毛でおおわれた野蛮人のいる幻想的な場面を表わしている。婦人はローブとエナンがほとんどであり、男性は緊湊なフルボアンとボネを用いている。

ウアランドヒート型ロールは15世紀前半に大いに流行したものであり、ローブとエナンは1430年頃から70年頃まで流行したものである。また、ゆったりとしたジャックやシャフロンは15世紀前半の流行であり、肩に詰物のあるフルボアンとボネは後半の流行である。

以上のように、この2点のタピスリは、制作時期が比較的接しているにもかかわらず、それぞれ15世紀前半と後半の服飾を表わしている。すなわち、タピスリは服飾の流行に敏感であり、その時期の最新のモードを表わしているのである。したがって、タピスリに表わされた服飾は、単に個別的な服飾の資料としてだけでなく、当時の人々の生活意識が反映されたものとして考えられねばならないと思われる。